

句
遊

第
四
集

平成十一年三月

序

長谷川 展良

合同句集「句遊」も今回で第四集となった。第一集を平成五年三月に刊行し、以来二年単位で発行を続けてきた。

従って、今回は平成九年、十年の詠草が対象となり、各人の自選による十八句を取り揃えた。

当会は発足の当初より俳句結社の偏向を避け、自由闊達な雰囲気の中で宗匠も置かず、遊びと親交を中心に俳句を楽しむという運営方針をとってきた。

句柄も千差万別、勝手気儘で、極めてバラエティに富んだ句集であると云ってよい。

その中で、当会発足の幹事である原柳峰、坂内信造の両氏をはじめ故人となった天野泊舟氏など数名の常連が紙上から消えてしまったことが何としても淋しく感じられてならない。

しかし反面では新しく入会された面々により大仰に云えば、監査役を体験した者の共通の人生観を彷彿させる新しい句に捕われて、その淋しさもカバーされているように思える。

会のモットーは「楽しみながらの俳句上達」であるが、第一集から列べてみて、果して結果はどうであろうか。

亀と兎の駆け足競争では、兎が昼寝をしてくれたお陰で亀は兎に勝つことが出来たが、わが亀軍団の走り具合

は如何であつただらうか。

兎と一緒に眠りこけてしまった亀がいなかったと云い切れるかどうか。

俳句は趣味、道楽の範疇に入るとは云え、自己研鑽を伴つてこそ面白味が倍加されるものだし、家族、同僚の共感も得られるものではないかと考えられる。

この際、自分自身は勿論のこと、自選十八句を振り返つて各人が胸に手を当ててみる事が大切であろうと思われてならない。

第五集に向けて今日から亀軍団としての自覚を新たに
して取組むことを公約して、諸者各位にお読みいただき
たく考える。

なお、本句会の例月の運営、会場の設定、ならびに本
句集の編集等にご尽力頂いた幹事の方々に厚く御礼申上
げたい。

(付 記)

平成九年、十年度句遊会の活動状況

月例会会、新東京ビル菱友会

写友会、画友会との合同展 平成九年十月

同 平成十年十月

目次

小鳥のさえずり	青木 忠美	六
二十一世紀	石野 喜双	八
更衣	奥田 悟誠	一〇
佃の小春	坂内 信造	一二
良夜	勝賀瀬ゆうじ	一四
箱根の四季(四)	武井 治	一六
摩天楼	田中保一郎	一八
無言館	中路 素童	二〇
巡礼	生江沢広雄	二二
落葉	丹生谷 龍	二四
思い出のチロル	長谷川草洲	二六
貴晩晴	林 泰亀	二八
都鳥	福田 豊太	三〇
静寂聞く	藤川 道夫	三二
薔薇館	三宅 申	三四
龍馬像	宮川 弘道	三六
冬の火花	吉村 正	三八
碧雲	渡邊 田貫	四〇

作

品

小鳥のさえずり

青
木
忠
美

初曆旅の予定に赤い丸

健在を静かにつたへ年賀状

早咲きの梅一鉢の置き所

木の芽山この頃建ちし家白し

花にたつ二人揃ひて幸とせん

若き日のおのが姿かあめんぼう

一列に風鈴の鳴る海の家

波立ちて片瀬西浜夏に入る

甚平着てゆつくり生きてゆくとせん

傘寿いましみじみと聽法師蟬

雨もやみ芒の似合う奥箱根

朝寒や江の島はるか富士も見え

遠雷は眞鶴岬か湯河原か

蟬しぐれ鎌倉山のそば処

住み古りぬ百日紅も老ひにけり

まつ直ぐに生きて傘寿こえ天高し

小春日や浜の駅には半袖も

落葉掃く人に無言の会釈して

二十一世紀

石野喜双

ほの暗き衣桁の晴着 初鴉

竹の子にひそむ大地のエネルギー

葉桜の荒城に吹くハーモニカ

草餅が喰へるか二十一世紀

春燈下 送られる人送る人

肩書がとれて甚平の軽さかな

朝市を早めに仕舞ふ 走り梅雨

第百回句遊会なり 百合の花

八ヶ岳 里に湧水 蕎麦の花

法師蟬 蒼き遺影は挙手の札

買ひおきの本ばかり増え夜の秋

落武者の村は二十戸 芒かな

竹の春 合わす太鼓は寮歌祭

秋の灯や 古本市の店じまひ

朝寒や 外湯の街に下駄の音

デパートで帽子を試す冬はじめ

銀行がまた一つ消え都鳥

腕白も大人になって 餅をつき

更衣

奥田悟誠

春一番庭の梢を駆け巡る

春寒し懐手して躓けり

新婚の野良着姿の春田かな

孫たちの声に囀り搔き消され

連れ添って代わり映えする更衣

薔薇園に晴着姿が花を添え

節樽立樹齡にめげず若葉萌ゆ

人影をチロチロ映す山清水

かがり火に揺らぎ映えてる夜の葉桜

甚平着て乙でいなせな男衆

蝉しぐれ五臓六腑に浸みわたり

二次会を終えて一息夜の秋

秋燕曠野に影を落としけり

群青の空を飛び交う赤とんぼ

菰被り色香を競う冬牡丹

佃の小春

坂内信造

人の世の何を眺むる初鴉

ガスタンク大きく見えて春立つ日

春寒し自動演奏するピアノ

柳の芽客待つ車夫も築地かな

すぐそこに父の齢あり沈丁花

昼の酒わが世のさくらさくらかな

怒濤なき東尋坊の春愁ひ

あめんぼうの軽く他愛もなき水輪

葉桜や城下町すぐつきあたる

若葉風からくり時計鳴り出しぬ

蝉鳴いて小さな町が動き出す

百日紅女操るブルドーザー

萩咲くやわが眼裏の白豪寺

秋暑し誰も住まざる本籍地

朝寒や飯の炊けたる電子音

秋燕勝関橋をくぐりけり

小魚を干して佃の小春かな

計算の下手な女や餅を焼く

良　　夜

勝賀瀬ゆうじ

初曆むだな予定をしるしたる

春立つや残りし雪を踏みもして

白梅や明るくなりし庭の隅

春燈小声で話すこともなし

囀や窓越しの枝高かりし

笛を握り出すほどの力あり

新緑の眼に一本の寺の道

妻活けし百合の香りの部屋せまし

草も木もあまたの石も晩夏なる

窓ひらきとり込む虫の声一つ

庭の萩手にふれて来て湯呑もつ

夫婦して花札めくる良夜かな

秋燈や掛軸を背に書く手紙

掃きおえし隅の落葉に薄日さし

短日や時計の振子きぜわしく

眼を離すうちに潜りしかいつぶり

雪おとし赤再びの青木の実

手紙かくたたみのへりに日脚伸ば

箱根の四季（四）

武井治

杉鉾の立ち揃ひけり初御空

三極の花に光陰流れ出す

古の彩を重ねて木彫雛

老梅の和らぐ影や日の障子

けもの道辿れば清水響あり

草餅や峠の婆は赤襷

新緑やシヤム猫の眼のかがやきて

衣更えいのち余さず生きる日々

大岩を跨ぐ大樹の気概満つ

霧冷えの今日一日は無音なり

遠雷や外輪山を一巡り

野佛や忘れしまま草茂る

高原の道なほ遠し草紅葉

裏木戸の乱れし萩をそつと寄せ

箱根路の果ての果てまで良夜かな

山荘に山鳩啼いて木の実降る

優しさは和菓子に添えし返り花

老なればよろず早めに冬支度

摩 天 楼

田 中 保 一 郎

初曆約束の日を確かむる

紅梅や人住み馴れて老いし村

春一番人事移動の内示あり

芽柳や釣舟舫う古利根川

雛の間明治の時計鳴りにけり

切株に腰おろす妻木の芽風

初蝶や対岸に今朝人を見ず

柿若葉朝の目薬浸みやすく

山百合や滝の音する岐れ道

大手町土曜の午后や蟬しぐれ

路地奥に白百合咲けり翁住む

風鈴や煙草を止めて二十年

縁側の有る家恋し百日紅

草の穂に揺れて螿螂怒りけり

石榴嚙む大正昭和遠きこと

摩天楼かすめて海へ都鳥

初時雨妻の不在に馴れにけり

わが屋根と並ぶポプラや冬の雲

無言館

中路素童

祝膳の円居に慈光今朝の春

鷗尾の金光溢れて春立ちぬ

柳の芽恋の丸ビル遠くなり

踊り子のルージュ並びて春燈

春愁や干潟の底に貝眠る

雷過ぎて馬のたてがみ乾きだす

ジョギングの風の匂ひに夜の秋

海境に消ゆる白帆や晩夏光

道祖神見えつ隠れつ蕎麦の花

文豪の居間簡素なる竹の春

実石榴やバス乗入れし佛みち

山霧の残りて明けぬ宿場町

柿簾風林火山の幟揺れ

秋深し丘に暮れ行く無言館

身に入むやパレット遣し溶けぬ色

露の世のふるさと信濃秋寂びて

化野のとろけ地藏や冬枯れて

天神に逢瀬の影や日脚伸ば

巡 礼

生 江 沢 広 雄

立春や野鳩ついでむ鬼は外

とんびの輪櫓円に流れ春一番

田楽やほのかに匂ふ母の味

段々と空に列なる春田かな

雛選び立ち戻りをりもとの店

春蝶や読み終りなる文庫本

草餅や母の使いし欠け茶碗

春愁や道しるべなき岐れ道

新緑や天に向いて叫びをり

あめんぼう机に傷のあまたあり

泣きすぎて道に伏せいる油蟬

蠅螂や塵のつもりし古机

竹の春木洩れ日浴びし道祖神

鈴虫や妻との会話とぎれけり

乙女子の八重齒美し石榴かな

巡礼の鈴遠ざかる夕芒

橋渡る下駄音響く寒の入り

鷹舞うや諏訪の神木渡り立ち

落葉

丹生谷
龍

水光る 早瀬の岸に 露の蔓

春寒し 髭の浪人 ピアス揺れ

梅一輪 祖母の遺品の 文机

夕陽さす 遺跡を包む 春田かな

幻の 初蝶消えし 城の跡

若葉風 試合へ急ぐ 女子大生

甚平に 家族は遠し 缶ビール

柩車待つ 門に遺愛の 百日紅

墓くれて 無明の闇に 百合白し

睦まじく 森の木魂と 水馬

湯船から 杉を見上げる 良夜かな

朝市の 霧の中から 馴染み顔

雨上る 女人高野の 法師蟬

無緑塚 崩れて風の 芒徑

姫塚や 熊野古道の 夕時雨

蹲に 散りし躑躅の 返り花

落葉焚く 煙は遠き 月日かな

暮れ残る 穂高連峰 冬はじめ

思い出のチロル

長谷川草洲

植ゑ終りほどく苗木の枝弾け

筒鳥や朝の雲脱ぐ会津駒

舟虫の後ろ足より歩きそむ

万緑や岨に古城のただ一つ

マーモット穴に顔出すお花畑

氷河見ゆ山の斜面に放し牛

木に凭れギター奏でる夜涼かな

稲妻や火の筋走る雲の中

鶺鴒の群るるいくりに秋の怒濤かな

魚はねる川辺虚子の碑花芒

水滲む道の暗みに水引草

波の引く岩小走りに石たたき

流燈の揺れつつふゆる灯影かな

明けの靄木々に立ちこめ黒鶉

音たてず揺るるマストや十三夜

雀らの甍に転ぶ菊日和

一湾に午報ひろがる石踏日和

市立つやうろつく僧の懐手

貴
晚
晴

林
泰
亀

鬼瓦凜と踏みつけ初鴉

孫のあと老婆追い駆け初詣

お雛さま満面の笑み孫娘

新緑の並木の道を茶髪の娘

とげぬきの路地丹精の百合香る

たどたどし残暑見舞もいと嬉し

朝霧やお馬の親子草を食む

肴にも晩夏の匂いひとり酌む

つとめ了え家路を辿る良夜かな

夜は三更秋の灯とぼる学びの舎

柿の実の色こそよけれ夫婦碗

秩父路は山門深く竹の春

将棋負け孫と啜るや根深汁

間のびして石焼芋の声聞こゆ

尾っぽ立て肅肅すすむ鳩の群

冷気満ち鳥さえ飛ばず寒に入る

大川に今も舟追う都鳥

けなげにもまた哀しくも返り花

都 鳥

福 田 豊 太

立春や外人墓地の姉妹

露の臺好みし妹の今は亡く

幼な子の指さすさきの飾り雛

夕闇て春燈あまた東山

しゃぼん玉追ふ子の空は夏立ちぬ

短夜のいつしか明けて旅の朝

時折りに雷鳴きこえ昏れなづむ

清水の舞台に遠く法師蟬

村の子の小川に遊ぶ晩夏かな

母の忌や芒をわけて墓まいり

秋高し時を刻みし古時計

足遠くなりし友より柿届く

広隆寺半跏思惟像秋たけし

足をとめ手にふれて見む返り花

冬はじめ列車の窓に遠浅間

落葉踏みひさしく合はぬ友とゆく

風の意に添いて飛び立つ都鳥

間をおきて雲の影さす寒の入り

静寂聞く

藤川道夫

立春や昨日の豆を踏むまじき

芽柳を背にシャッターを頼みけり

ただ黝し年に耐えたる梅の幹

露の臺布団を剥がれし子のごとく

谷越えに群れて消えたる花吹雪

春灯に酔客の影よろめけり

走り梅雨リュックが駆け出す塾の前

ゴミゆるく流れを変へし水馬

風鈴を去年の釘に吊しけり

遠雷やビヤガーデンに微風来る

よき風を待つ芒野のカメラかな

顔洗ふやうに啜りし熟柿かな

我が影に物思ひする良夜かな

ざくろ生る庭繋がれし犬の吠え

一呼吸して向きを変へし落葉かな

喉ごしに熱さ降り行く根深汁

寒の入り眼鏡を外し静寂聞く

この年のしきりに冬の寒さかな

薔 薇 館

三
宅
申

裏口の昀り早し露の臺

水軍のひそみし岩や春怒濤

濃き眉の巫女きびきびと梅日和

囀りや雲うすれゆく八ヶ岳

対岸に春の灯つらね近江かな

大正の風吹き抜ける薔薇館

あかつきの音なき雨や額の花

葉桜やもの憂き午後の長命寺

仲店を出て佛具町夜の秋

八月尽しんかんとして勅願寺

風鈴や葛籠の底の父の文

頼杖の岩波文庫良夜なる

ゆるやかな瀬田のながれや秋燕

道閉ざす落人塚の霧時雨

退院の妻と語らふ青木の実

返り咲く桜の下の忠魂碑

群れ去りてまた群れきたる都鳥

肩車して歩みけり日脚伸ぶ

龍馬像

宮川弘道

春立つや茶房となりし藁の小屋

春の雪降りては消えて赤煉瓦

荒波や八十八夜の龍馬像

いななきを遠くに聞きて麦の秋

昼の月親より高き今年竹

夜の秋横臥て聞くシューベルト

雷多き年豊年と草刈女

終戦忌ショートパンツの乙女たち

故郷や牛馬は見えず白木槿

虫の声入れて各駅停車かな

露霽れて標高は指呼の裡にあり

実むらさき雨の上がりし女坂

ベイブリッジ抜ける巨船や柿日和

杉の枝落とす鈍音冬はじめ

橋渡る僧侶の下駄や冬はじめ

渡月橋ふと水を翔つ百合鷗

嬰鑠と弥彦を登る冬帽子

大寒や一と夜荒れたる室戸沖

冬の花火

吉村正

役者絵は写楽の寄り目初暦

玄をこそ目出度かるらん初鴉

手品師の如帽子より寒卵

春一番音して絵馬の犇ける

山にみて彦かへす山春立てり

梅三分白鳳仏の眉の弧に

初蝶の花えんどうにまぎれけり

母の亡き家にも馴れて春ともし

新緑や動きのゆるき太極拳

くもりゐる蕎麦屋の鏡走り梅雨

風鈴や妹に短き便り書く

百合の香 ■ 坊の暗きに曼陀羅図

母恋ふやつくつく法師いまや急

マリア像襞ゆるやかに晩夏光

石積むや賽の河原の霧動く

人ゆくは道ある証柿の秋

落葉踏む音に旅めく思ひかな

一葉忌旅寝して見る冬花火

碧　　雲

渡　邊　田　貫

初鴉古き夜空を破りけり

初蝶や傾めに舞いて老の背を

花一切残るも散るも櫻花

春燈や音なくゆらぎ京の水

等々力も足音しげく立夏かな

新緑や萬物覚めて鳥の声

短夜やあまりに茫き京のゆめ

雨具なし天を恨みて走り梅雨

雷の次は俺だと力む父

風鈴も何時やら止まり夕の鐘

百日紅猫の思案す昼下り

法師蟬早くも知らず季の移り

土の香をほのかに流す朝の霧

湾岸にクレーン並びて秋高し

高天に鴟一線の音を引く

柿好む鐘もあるらし奈良の寺

暖房のマシン交換冬はじめ

青木の実赤鮮やかに雪の朝

あとがき

四二

「句遊」第四集をお届けします。

本集への出句は十六名ですが、会を休まれたり、辞められた方で、平成九年、十年の間、月例会に投句された方、奥田悟誠さん、坂内信造さんの句も、委員が選び、載せることとしましたので、計十八名となります。

平成九年、十年度は吟行を行っておりませんが、本年は何とか実現しようと思っております。

編集に当り、出句は前集同様、自選十八句としました。また前書き、ルビを一切つけぬことといたしましたのでご了承ください。

次集第五集は、創刊十年目となる平成十一年を予定しております。

皆様の一層のご健吟を祈念いたします。

編集委員

石野 喜次

勝賀瀬雄次

中路 良昭

吉村 正

平成十一年三月

(中路 良昭記)